

結果概要

「中高年者の生活実態に関する継続調査」 8 ウェーブ

<調査対象者>

2010 年以來、2 年毎に実施されてきた「中高年者の生活実態に関する継続調査」第 8 回ウェーブは 2024 年 1 月に実施されました。2020 年に 50 代の追加サンプルを含め、第 8 回調査では、54 歳から 97 歳の男女それぞれ 1,082 人、計 2,164 人から回答がありました（回収率は 80.4%）でした。

本概要では、2010 年から 2024 年にかけて継続して回答をいただいた方について結果を報告します。2024 年 1 月時点で、男女別の配偶関係をみると、男女ともに最も多いのは有配偶者で、男性 85.6%、女性 59.6% でした（図 1）。ただ、同数値は 2 年前と比べて、女性は 3 ポイント、男性は 1 ポイント減っていました。同時に、女性の 31.7% が死別者となり、この 2 年間で同じ 3 ポイントの上昇がみられました。

一人暮らしの割合を年齢階層別にみると、女性の高い割合が明らかになりました（図 2）。75 歳以上にもなると、約 5 分の 1 以上の女性が一人暮らしをしていました。全体としては、前回調査に比べて 1 ポイント程度の上昇でした。

<2010 年以降の変化：経済状況・気持ち・生活>

2010 年以降の資産や意識の変化を男女別に各ウェーブの平均でみてみましょう。まず、平均的な全資産額の男女格差（男性中央値を 100 とした場合）の変化です（図 3）。全体として格差は縮小傾向にあり、その背景には女性の全資産額の上昇があります。そこではおそらく、死別した夫から資産を相続したことが理由の一つとして考えることができます。その一方で、貯蓄が全くない者の割合についてみると、男女共に貯蓄ゼロ割合は 1 割弱と、この 10 年ほど概して安定しています（図 4）。

図1 男女別配偶関係（%）

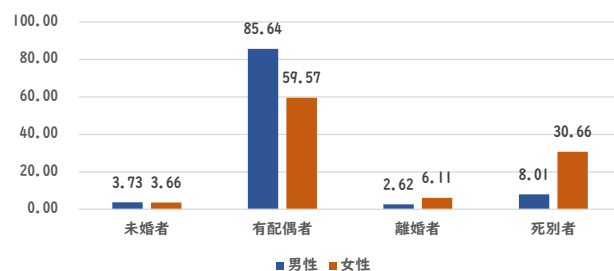


図2 男女別年齢階層別一人暮らし割合（%）

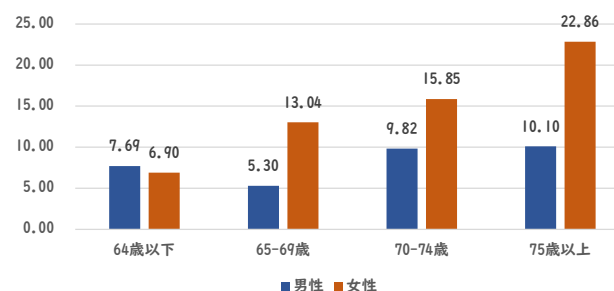


図3 資産額の男女格差（男性中央値=100）

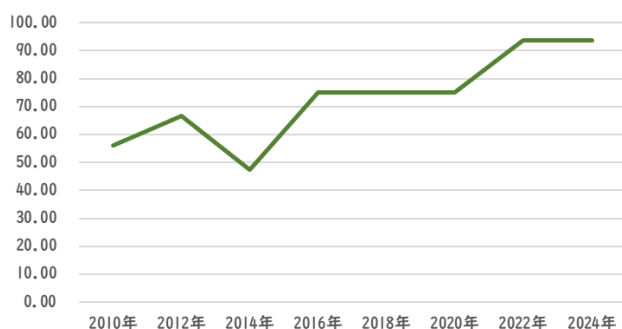
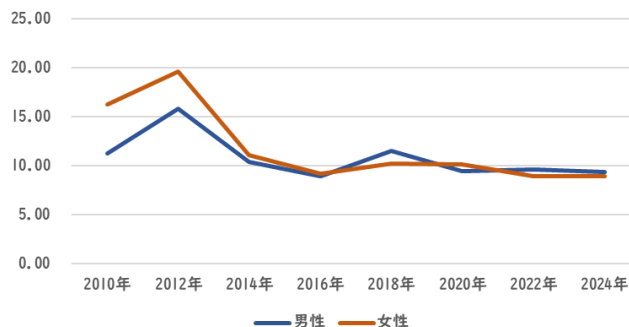


図4 男女別貯蓄ゼロ割合の変化（%）



次に、意識の変化についてみていきましょう。まず、「社会を10つの階層に分けるとすると、自身の生活水準からみて、あなたはどの階層にいますか」という質問への回答（階層帰属意識）の変化を見たのが図5です。2010年から2012年にかけて一時的にジャンプが見られますが、2014年以降、比較的安定しています。あえていうなら、女性の方が2018年に下がってその後緩やかに上昇する傾向が見られます。一般的な生活満足度の変化はどうでしょう。図6がその結果です。コロナ禍の2020年に男女ともに生活満足度が下がりますが、その後、男女共に上昇傾向にあります。特に、女性については、コロナ禍を経て2024年までの上昇が明らかです。高齢期に入って年齢と共に生活満足度が上昇する結果もみられるので、ここでは加齢効果であるとみるのが妥当かもしれません。では、どうして年を重ねると生活満足度が上がるのか。その理由をあきらかにするにはもう少し詳しい分析を進めなくてはなりません。

図5 男女別階層帰属意識（10ポイント）の変化

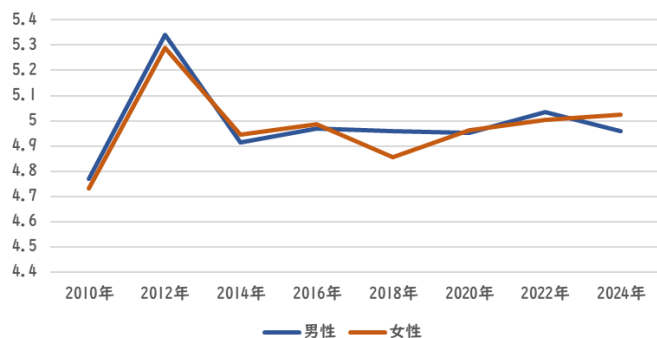
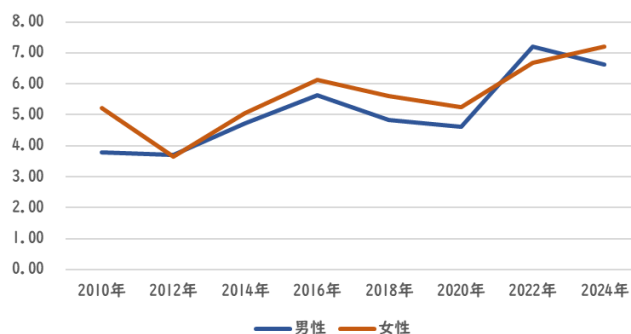


図6 男女別満足度スコアの変化



一般的な信頼度の変化は図7です。こちらも男女共に上昇傾向にあり、女性の間での上昇が2022年から2024年にかけて大きいことがわかります。社会に対する一般的な満足度も高齢になるほど上がる傾向がここでも確認され、その傾向は程度に差はあるものの男女ともに共通しています。では、心理的なストレスの程度の変化はどうでしょう（図8）。心理的なストレスは女性の方が平均的に高く、2018年から2022年にかけての上昇も男性よりも大きいことが見て取れます。ただ、2024年には、女性のストレス値が下がり、逆に男性の値が上昇しているため、男女差が縮小しています。

図7 一般的信頼度の変容

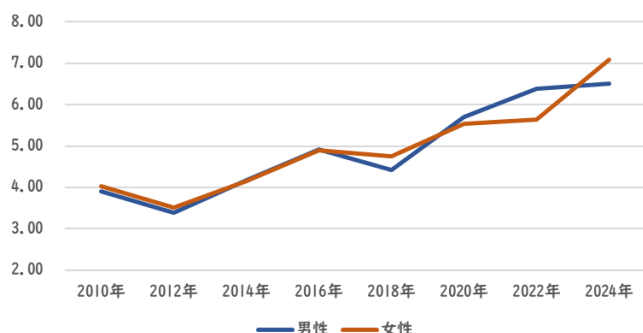
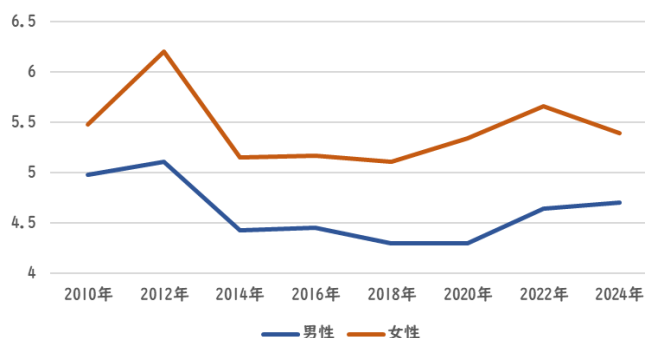


図8 男女別心理的ストレス程度（K6）の変容



以上、本調査が開始された2010年から2024年という14年間の変化を記述しました。人々の意識からみて、第8ウェーブに着目すると、男女の間で異なる動きが垣間見られました。調査対象者の配偶関係や家族タイプの違いは男女の間で小さくないので、その違いが意識や生活状況に今後どのような影響を及ぼすかについてはさらなる分析を進めます。2020年以降のコロナ禍の影響についても、さらなる考察をすすめていきます。